

聖書：創世記 22：1～8

説教題：神が備えてくださる

日時：2023年10月22日（朝拝）

「これらの出来事の後、神がアブラハムを試練にあわせられた」と創世記 22 章は始まります。実は聖書の中で「試練」という言葉が最初に出て来るのがここです。しかしこのことはこれがアブラハムにとって最初の試練であったという意味ではありません。むしろ彼の生涯はずっと試練の連続とも言うべきものでした。75 歳で神からの召命を受け、100 歳の時に約束の子を得るまで数々の試練がありました。そのことを考えれば、「神がアブラハムを試練にあわせられた」というこの言葉は特別な重みを持っていることが分かって来ます。これまでの試練も十分大きいものですが、それらとはある意味でレベルが異なる最大級の試練が彼に臨んだのです。

1 節で神が「アブラハムよ」と呼びかけると、彼は「はい、ここにおります」と答えました。ここに神とアブラハムの良い関係、正しい関係が示唆されています。ですから今回アブラハムに試練が臨んだのは彼が何か罪を犯していたからではありません。神と正しい関係にあるアブラハムに試練は臨みました。試練は別の言葉で言えばテストです。テストは、それを受けるものの状態を明らかにします。ペテロの手紙第一 1 章 7～8 節で試練は金属を精錬する火にたとえられています。製錬する火は金属にダメージを与えません。むしろその金属に付着してかさを大きくしている不純物を燃やし尽くし、金属を純粋にし、かえってその価値を高める働きをします。そのような試練が晩年のアブラハムに、その信仰の光をいよいよ輝かせるために臨んだのです。

その試練はどのようなものだったでしょう。2 節：「神は仰せられた。『あなたの子、あなたが愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そして、わたしがあなたに告げる一つの山の上で、彼を全焼のささげ物として献げなさい。』」これはアブラハムに何という激震を与える言葉だったのでしょうか。主が献げなさいと言っているイサクはアブラハムとサラが待ちに待ってやっと与えられた子です。そのイサクをアブラハムがどんなに愛し、大切にしているか、主は良くご存知です。神はここであえて「あなたが愛している一人子イサク」と言っています。なのに主はそのイサクを全焼のささげ物として献げなさい」と言います。全焼のささげ物とは全部を燃やし尽くして主にささげることです。これを聞いて色々な疑問が心の中に湧き起こ

って来ます。まず思うのは、主はどのようなおつもりなのか。ここまで待たせて、やっ
と子を与えて、今度はその子を燃やしなさいと言われるとは我々を弄んでおられるの
か。また主の約束はどうなるのか。主はこれまでアブラハムから生まれる子を通して
約束された救い主は誕生すること、また彼の子孫は空の星のように多くなることを語
って来られました。なのに一人子イサクを失ったら約束はどうなるのか。また、人を
いけにえとしてささげるのは異教世界では行われても神の民の間ではあってはなら
ないと後にはっきり禁じられます。第一、人を殺すこと自体、御心に反しているの
ではないでしょうか。それを神ご自身が命じるとはどういうことなのか。アブラハムは
頭がグラグラしそうになったのではないかと思います。

しかしこの試練を考えるにあたって、私たちはもう一度1節の「これらの出来事
の後」という言葉が持つ意味を考えたいと思います。つまりこの試練はいきなり何の準
備もないまま、アブラハムに臨んだのではありませんでした。「これらの出来事」の
後、この試練は臨みました。アブラハムはこれまで立派に神に従ったり、逆に失敗し
たり、色々な経験をして来ました。そういう歩みを通して神を深く知る霊的な成長を
導かれて来ました。そういう「これらの出来事の後」、この試練は臨んだのです。つま
り十分な準備がなされた上で、この試練は彼に訪れました。そういう意味でこの試練
はアブラハムの信仰の生涯の総仕上げとなるもの、これまでの彼の学びの成果が試さ
れる最終テストであったのです。

それにしてもこの試練にはどんな意味があったのでしょうか。イサクを全焼のささげ
物とすることに何の意味があるのでしょうか。もちろん神はすべてのことに意味と目的
を持っておられます。しかしここでそのことは説明されていません。アブラハムに前
もって開示されていません。その状態で神に従うかどうかを試されています。私たち
も同じです。色々な苦しみにあう時、なぜ神はこのような状況に私を置かれるのか、
神からの説明はありません。もし説明があったら、私たちにとっては楽ですが、それ
では試練になりません。最初に答えを教えたら、それはテストにはならないですね。
答えが与えられていない中で私たちがどのように考え行動するかによって、私たちは
試されるのです。どこまで成長したかが明らかにされるのです。

神がこの試練によって何をテストしようとしたかは次回の12節を見ると分かり
ます。そこで神は御使いを通して「今わたしは、あなたが神を恐れていることがよく

分かった」と言われます。つまりこのテストはアブラハムが神を恐れているかどうかを試すものでした。神は焼け焦げたイサクが欲しいわけではなく、アブラハムの心を見ておられるのです。もちろんこの恐れはビクビクするという意味の恐れではなく、神を心から愛し敬うという意味の恐れです。言い換えれば神に第一の信頼を置き、神に第一の忠誠を尽くすかどうかということです。そのためにアブラハムにとって最も大事なものが引き合いに出されたわけです。誰でもこの箇所を読んで最もショックを受け、心に痛みを覚えるのは、献げなさいと言われたイサクがアブラハムにとってどんなにかけがえのない存在かをここまで読んで来た私たちは知っているからです。他の何かをささげよと言われたら、アブラハムは問題なく献げたでしょう。しかしあなたが愛している一人子イサクを献げよ！と言われたから厳しい。でも、だからテストになるのです。あなたは本当に神を恐れて神に第一に愛と忠誠ささげるのか。神は私たちに私たちのベストのものをささげるようにと求められます。私たちが要らないと思うものをささげても神は当然お喜びにはなりません。もし私たちがこれだけは神に献げられないというなら、あるいは神に従う歩みに条件を付けるなら、私たちはそれらを神よりも上に置いていることを意味します。つまりそれらは私たちにとっての偶像になっているということです。もしアブラハムがイサクを大事に思うあまり、神に従えないなら、イサクがアブラハムにとって神に代わる偶像になっていることを意味します。アブラハムが神をどのように考え、信じているかは、このイサクを献げよという命令に従うかどうかによって究極的に試されるのです。彼が神を心から恐れ、神に第一の信頼を置き、神を心から愛している者なのか、それとも心の深いところでは神を信じず、神を愛してもおらず、いざという時には別のものを選び取って行く、結局は偶像礼拝者なのか。

果たしてアブラハムはこれにどう応答したでしょうか。素晴らしいことは、このテストにおいて神を恐れ信じるアブラハムの信仰が光り輝くということです。今日の箇所にもそのような3つの彼の姿を見ることができると思います。一つ目は3節に「翌朝早く、アブラハムはろばに鞍をつけ、云々」とあることです。彼は愚図愚図しませんでした。きっと彼は主の言葉があった日の夜はもがき苦しんだのではないかと思います。祭壇の上で焼かれるわが子イサクの姿を想像して、心が引き裂かれそうになったでしょう。また何度となく悪魔のささやきと戦わなければならなかったでしょう。「神はあなたを愛していない。」「愛しているなら、どうしてこんなひどいことを要求するだろうか。」「この際、神と決別してイサクと楽しく余生を過ごす方がずっと良いでは

ないか。」「少なくとも決断を急ぐ必要はない。結論は先送りにし、ゆっくり考えるのが良いのではないか」等々。しかしそのような激しい戦いを経て、アブラハムの心の中では主を信頼する心が打ち勝ったのです。これまで主について学び、主を親しく知って来た者として、主を信頼し、主に従う道を行こうとする思いへ奮い立たせられたのです。アブラハムはロバに鞍をつけ、二人の若い者をイサクと一緒に連れ、薪を割り、出発しました。

二つ目は 4～5 節にある 3 日目の日のことです。アブラハムが目を上げると遠くの方に神が指定された山が見えました。ここから三日目になってもアブラハムの決意は変わらなかったことが分かります。ここに来るまで考える時間はありました。しかし彼の決心は鈍っていません。彼は若い者たちにこう言います。「おまえたちは、ろばと一緒に、ここに残っていなさい。私と息子はあそこに行き、礼拝をして、おまえたちのところに戻って来る。」 後半の文章の中の「行く」「礼拝する」そして「戻って来る」という言葉はいずれも複数形で書かれています。つまりアブラハムは帰って来る時もイサクと一緒にであると若い者たちに言ったこととなります。これはどういうことなのでしょう。イサクは山の上で全焼のささげ物となるはずではないのでしょうか。これは若い者たちに怪しまれないためのウソだったのでしょうか。参考になるのはヘブル人への手紙 11 章 17～19 節でこの時のことについてこう言われていることです。

「信仰によって、アブラハムは試みを受けたときにイサクを献げました。約束を受けていた彼が、自分のただひとりの子を献げようとしたのです。神はアブラハムに『イサクにあって、あなたの子孫が起こされる』と言われましたが、彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできると考えました。それで彼は、比喩的に言えば、イサクを死者の中から取り戻したのです。」 この 18 節で引用されている言葉は創世記 21 章 12 節です。神は創世記 21 章 12 節で「イサクにあって、あなたの子孫が起こされる」と言われました。アブラハムはこの御言葉に立って今回の事柄全体を考えていたことがこのヘブル書の言葉から分かります。神ははっきりとイサクを通して約束の子孫を起こすと言われました。それが本当なら、たとえイサクを全焼のささげ物として献げても、神は必ずイサクを私に返してくださる。そのような復活信仰までアブラハムは心に抱いたのです。どのようにしてそのようなことが起こり得るのか、アブラハムもさっぱり分からなかったと思いますが、彼は神の約束の御言葉に堅く信頼していました。イサクにあって子孫を与えると神が約束してくださったからには、たとえイサクを山の上で献げても、神は彼を私に返してくださる。その信仰に立ってア

ブラハムは若い者たちに「二人でまた帰って来る」と述べたと考えられます。

そして三つ目は 6～8 節の場面です。アブラハムとイサクは二人きりで上って行きます。アブラハムはイサクに薪を負わせました。イサクはすでに 10 代半ばにはなっていたと考えられます。そんな中、イサクが問います。「お父さん。火と薪はありますが、全焼のささげ物にする羊は、どこにいるのですか。」 まさにど真ん中の質問です。一番大事な羊がないのはあまりに不自然でした。しかしこれこそアブラハムにとって最も答えにくい問いです。アブラハムは何と答えたのでしょうか。彼は 8 節で言いました。「わが子よ、神ご自身が、全焼のささげ物の羊を備えてくださるのだ。」 この言葉を私たちはどう見るべきでしょうか。「イサク、お前がささげ物なのだよ」とはここでは言えないから、ごまかした言葉だったのでしょうか。しかしただ信仰によってここまで進んで来た彼が、ここでいい加減な言葉を語ったとは考えにくいことです。この 8 節も先の 5 節と同様、彼の信仰から絞り出されるようにして発された言葉だったと見るのがふさわしいのではないのでしょうか。

今回の試練で一番きついことは、なぜ神はこんな命令を下されたのか、その理由や目的が説明されていないことでした。「イサクにあって、子孫が起こされる」という約束と「イサクを全焼のささげ物として献げよ」という命令は人間の頭で考える限り、明らかに矛盾しています。しかしアブラハムはそのあまり、神を疑い、神を捨てることをしませんでした。またイサクは失われると考えて絶望することもしませんでした。彼はこの問題の解決を自分の頭の中では行わず、「神ご自身が、全焼のささげ物の羊を備えてくださるのだ」と言って、神の摂理の御手にお委ねしていたことが分かるのです。神が備えてくださる全焼のささげ物とは結局イサクのことかもしれません。いや、そうでしょう。神がイサクを献げなさいと言っているのですから。しかし「イサクにあって子孫が起こされる」ということも、アブラハムは御言葉に立って堅く信じていました。この人間の頭には矛盾と見えることがどのように両立し、調和するのか、アブラハムにはさっぱり分からないものの、とにかく神が、ここまで恵み深く私を導いてくださった神が、これを命じておられるのだから、必ず良きに導いてくださる。だから今すべてを理解できなくても、神の不思議で恵み深い偉大な摂理の御手にお委ねして私は主の御言葉に従って行こう！アブラハムはそのように信仰を告白して、主に従う道を進んで行ったのです。そして次回、私たちは彼の信仰告白が彼の想像をはるかに超える仕方で成就するのを見ることとなります。そこにアブラハムが信じた通り、

神は備えてくださる神であることが明らかにされます。またこの試練におけるより大きな目的も見えて来ることになります。

私たちは今日の箇所から、どのような試練に置かれても、それは準備を経て与えられていることを覚えたいと思います。神は私たちに与えてくださった信仰の価値がそこでいよいよ明らかにされるように、信仰の光が輝き増すようにと導いておられる。そのような試みの中で私たちも「神が備えてくださる」との告白をもって従って行きたいと思います。主はご自身に従う者たちに必ず良くしてくださいます。ローマ人への手紙 8 章 32 節：「私たちすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるのでしょうか。」この主に信仰の目を上げて、主が命じられる主の山に上って行く者でありたいと思います。そしてその山の上に本当に主の備えがあることを発見し、しかも私たちの思いをはるかに超えるものが備えられていることを発見して喜び、一層神をたたえ、この神とともに歩む喜びになお深く生かされるアブラハムの子孫、信仰の民の歩みへ導かれて行きたいと思います。